唐招提寺舎利会開山忌に随喜して

明治大学助教授
駒沢女子大学講師
東方学院講師
阿部慈園
（横浜善光寺育英会参与）

1

若葉して　御目の雫　拭はばや

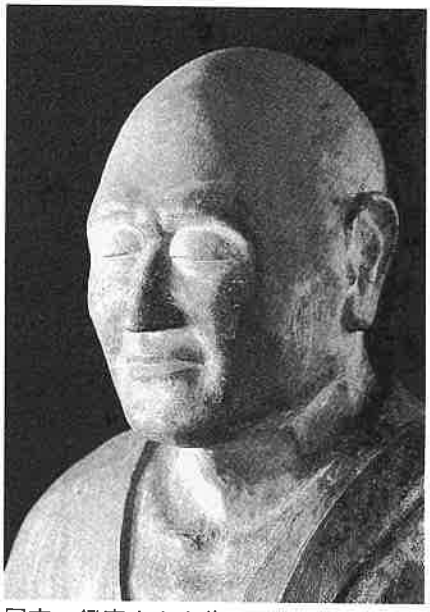
俳聖・芭蕉は奈良・唐招提寺に詣でたおり、盲目の鑑真和上像を拝して、その感慨をこの一句に託した。現在、和上の像は、昭和三十八年三月にもと興福寺別当一乗院の宸殿を転用して、御影堂とした堂宇に安置されている。芭蕉は、御影堂に移される以前の本願堂（旧開山堂）にまつられていた和上の像と対面した。それゆえ、この句碑は講堂の北東裏、本願堂の正面階段脇に立っている。

また、会津八一は和上の像に、

とこしへに　ねむりておはせ　おほてらの

いまのすがたに　うちなかむよは

と語りかけた。八一が訪ねたときの唐招提寺はずいぶんと疲弊していたのであろう。かれは和上像に向かって、永遠におねむりくださいませ、万がいつお目がひらかれることがあってこのおおてら（唐招提寺）の現状をつぶさにされ、むしろひどく涙されるよりは、と。



国宝　鑑真大和上像

中村元先生（東方学院長）の名代として、六月五日と六日律宗総本山唐招提寺の舎利会開山忌に随喜させていただいた。以下『成寿』誌上をおかりして、法要の一斑を紹介し、ついで授戒伝律の師・鑑真和上の来朝の意義について少しく考察したい。

2

六月五日晴れ。近鉄橿原線西の京駅を下車し、タクシーを駆って南大門前に降り立つ。孝謙天皇の手と伝えられる「唐招提寺」の門額（ただし模刻。その勅額は新宝蔵に保存）は、女帝ながら力強く雄渾に見える。書体は籠字という。門をくぐると金堂の偉容が目に飛び込む。高校二年の秋の修学旅行のとき以来であるから、何と三十三年ぶりの金堂である。本尊盧舎那仏等の諸仏を拝す。金堂正面の八本の列柱とその吹放しはつとに有名であるが、そのごくわずかの

膨らみ（エンタシス）をもつ「円き柱」はなつかしかった。少し高めの石段を下りて、右に向かい、鼓楼（舎利殿）を左に一べつして、校倉造の経蔵・宝蔵と礼堂・東室の間を進んでしばらく行くと御影堂の玄関に至った。

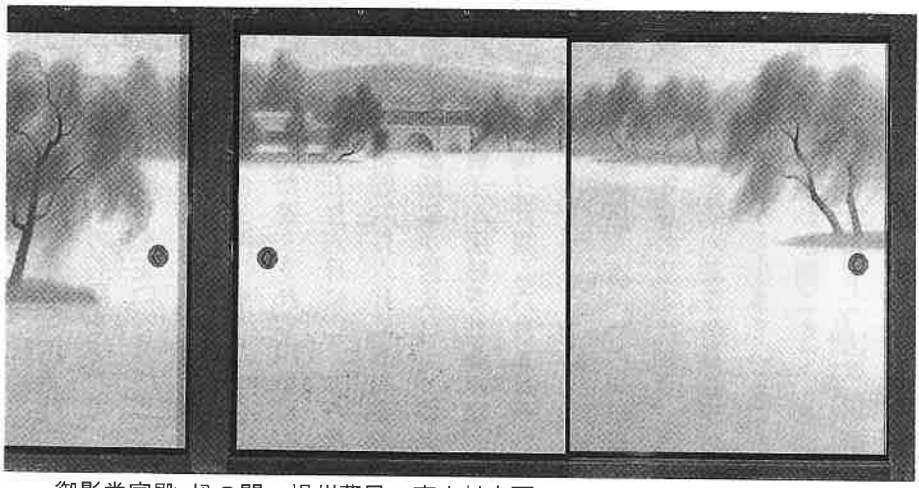
鑑真は唐招提寺が建立されて四年目の天平宝字七年（七六三）五月六日に亡くなられたが、その五月六日は新暦六月六日にあたるので、毎年この日に開山忌法要が営まれる。和上像がおさめられてある厨子が開扉されるのは、一年中でこの法要の前後三日間（六月五日から七日まで）のみである。

東山魁夷画伯の襖絵「濤声」の間に端座される和上像からは、不屈の意志の強さ、渡海の苦労の重さに弘法の慈愛の深さがひしひしと感じられた。お像はあたかも生きているごとく、鼻からは静かな息づかいが聞こえてくるほどだ。ひとつ気づいたことは、和上の法界定印の手の置き方が、日本のそれとは逆に右手を左の掌で包んでいることだ。これはむしろインド・中国の伝統をふまえている。

東山画伯のそのほかの障壁画をつぶさに見て御影堂を出る。門のすぐ近くの三暁庵にて薮内流のお手前をいただく。和上御廟にお参りして『舎利礼文』を誦す。墓所への参道の両側には沙羅双樹（和名夏つばき）が茂る。一樹の根元に目にまぶしい、落花の一つが置かれてあった。新宝蔵の前の桐も小さき白き花をいっぱいにつけていた。花に鼻を寄せると、品のよい香気が鼻孔をくすぐった。

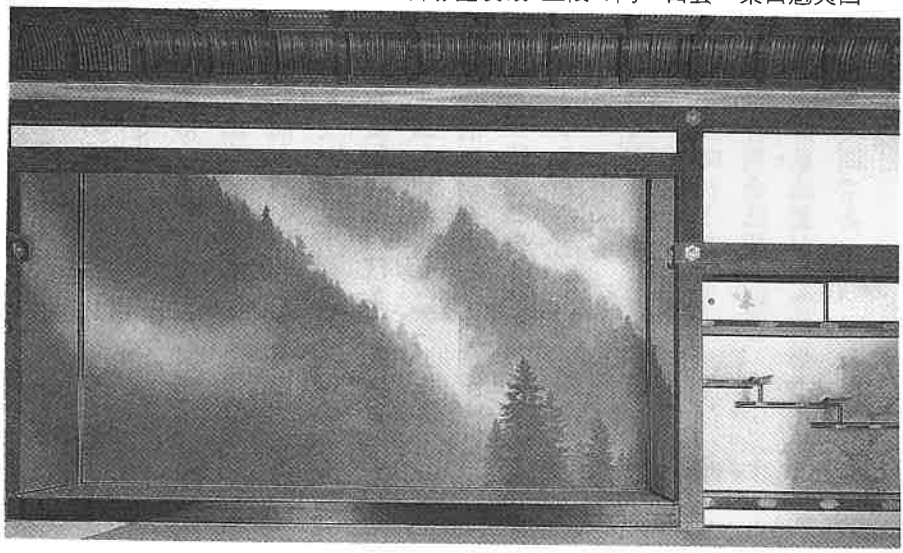
3

六月六日晴れときどき雨。午後一時より講堂において舎利会法要に随喜。開山忌すなわち鑑真和上の御忌法要が「舎利会」と呼ばれるのがずうっと疑問であった。五日御影堂で買い求め



御影堂宸殿 松の間　揚州薫風　東山魁夷画

御影堂宸殿 上段の間　山雲　東山魁夷画



た『古寺巡礼奈良⑨唐招提寺』（淡交社）を読んで永解した。森本孝順前長老によれば、和上は唐土より「如来舎利三千粒」を請求した。これは金亀（きんき）の乗った舎利容器とともに鼓楼（ゆえに舎利殿）に蔵されている。遠藤證圓現長老によれば現在三百粒ほどに減っているという。ともあれ、唐招提寺におけるこの仏舎利に対する崇拝。舎利信仰はただならぬものがあった。お正月を修する修正会は「舎利悔過（けか）法要」といい、十月に礼堂で営まれる釈迦念仏会の初夜は「舎利講式」と呼ばれる。

さて、舎利会はまず講堂で「舎利讃嘆」と「最勝王経講讃」が執行された。つづいて御影堂でも執行された。約一時間を要した。

講堂の本尊は弥勒如来の木造坐像で、同じく木造の持国天と増長天が左右を守護している。弥勒（マイトレーヤ）はふつう菩薩として造顕されるが、ここでは如来像となっているのはたいへんめずらしい。像の高さ二メートル八〇センチあまり、右手は施無畏（せむい）、左手は触地（そく）の印を結ぶ。

一般の寺院では、本尊の正面にそれに対峙して礼盤であり、その上に乗って導師が法要を主催するが、何と舎利会の講堂には、導師の乗る礼盤がない！　そのかわりに、本尊の前には、左右に設けられた講師台、読師台がある。講堂の名の由来は、講師が講師台にのぼって仏典の講義を行ない、寺僧がこれを聴聞するところとされるが、まさしく唐招提寺の講堂はその源初といえよう。遠藤長老が講師台にのぼっておられた。

ちなみに、講師が学僧の代表となる読師に口頭で講義し質問し、読師がそれに答えるのがいわゆる「論義」「問答」である。講師台と読師台はともに一段と高い座に席が設けられている。今日の寄席（よせ）の「高座にのぼる」の語源はここに

あるという。また、講師・読師が坐るところも半畳であるところから、他人の演説にたいして「半畳を入れる」ことの語源となったことも興味深い。

舎利会法要に随喜して、心から驚き、感じ入ったことは、遠藤長老および読師の僧は金糸・銀糸に刺繍された荘厳衣はもちろんのこと、絹製の法衣・袈裟ですらなく木綿ないし麻製を着用されていたことである。他の式衆・大衆も同様である。さすが、『四分律』を奉ずる律宗のお坊さんであると思った。回向文ののちに「南無過海大師」と三唱していた。

法要ののち、三時より東堂において「戒律仏教の流れ」と題する講演がなされた。駒澤大学名誉教授佐藤達玄先生のお話は熱が入り、一時間の予定が二時間を超え五時をすぎてしまった。先生は、インドの風土で生まれた戒律は、中国・日本にてはそれぞれの国の精神風土にあわせて人々が守りやすいようにいくぶん変容された（通受から分受へ）等とわかりやすく語られた。

4

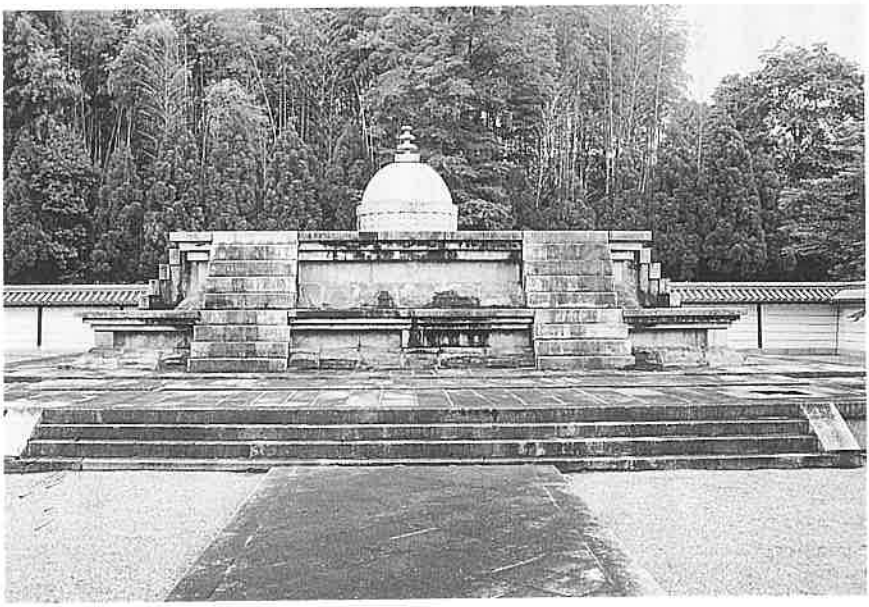
さて、鑑真和上の来朝の意義の考察に進むことにしよう。

鑑真（六八七―七六三年）和上は、中国江蘇省揚州に生まれた。十八歳で道岸律師から菩薩戒を、二十一歳で弘景律師から具足戒を受けて正式の比丘となった。弘景は南山律宗の祖・道宣律師の弟子であるから、鑑真は道宣の孫弟子ということになる。南山律（四分律）を中心とする戒律や天台教学をも学び、のちに日本律宗の祖となる。

第九次遣唐船に二人の若き僧が乗り込んでいた。大安寺の普照と興福寺の栄叡である。二人は、朝廷より学徳すぐれた授戒伝律の師を日本

舎利会開山忌　於講堂

唐招提寺戒壇



に請来するようにという命を受けていた。

処々を訪ったのち、当代きっての律師であった鑑真和上を揚州の大明寺に訪ね、和上の弟子のなかから日本への伝戒律師推薦をお願いした。当時日本への渡航は危険をきわめ、四船のうち、二船もしくは三船も沈むといわれていたから、かれの弟子はだれひとりとして「行く」というものはなかった。

「ならば、わしが日本へ行こう」

と、鑑真みずから、仏法を弘めるために、正式の戒律を伝えるために日本に渡ることを決意した。和上、齢五十五歳のことであった。

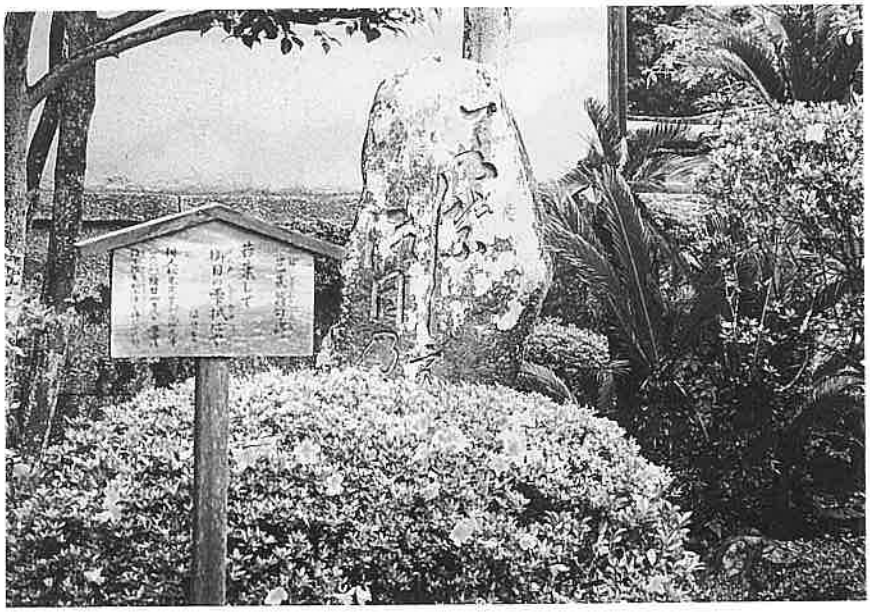
わが国への仏教の伝来は、一説によればその公伝は欽明天皇の十三年(五五二年、『日本書紀』説、五三八年の説もあり)とされ、すでに二百年を経過していたが当時の日本の仏教界は形だけの僧尼が多く、その風紀は乱れがちであった。何となれば、僧になれば兵役や納税などの義務からのがれることができるからであった。それゆえ、朝廷を初めとする当局は正式の戒師を請来し、正式の僧尼の育成をはかったのである。

しかし、鑑真の日本への渡航は困難をきわめた。第一回目の渡航計画は如海という僧の密訴によって挫折した。二人の日本僧は拘禁された。第二回目・第三回目は船が難破して失敗した。第四回目は師を渡航させまいとする弟子の霊祐などによって妨げられ、第五回目は遠く海南島にまで流されてしまった。鑑真は次第に視力がおとろえ、栄叡が客死する六十三歳のときついに失明してしまった。

失明にもめげず、それから三年後の天平勝宝五年(七五三年)の末、日本からの遣唐船に乗り込み、第六回目にして日本渡航に成功した。決意してから、何と十二年の歳月を費やした。翌天平勝宝六年四月入京した。東大寺に戒壇を築き、ここに正式に授戒の作法が日本に整うこ

会津八一歌碑「おほてらの……」

芭蕉句碑「若葉して……」



とになった。孝謙天皇をはじめ多くの人々に戒を授けた。東大寺に五年住し、天平宝字三年（七五九年）新田部（にったべ）親王の旧邸を朝廷より賜って、ここに戒律を教授する寺を設けた。これが唐招提寺である。

学者は鑑真和上来朝の意義を次のようにいう。聖徳太子が日本仏教興隆の礎（いしずえ）を築いたとするならば、形質ともに真正の仏教教団確立の最後の仕上げを果たしたのが鑑真和上の戒壇の設立であった、と。

会津八一の二歌を引用して了としたい。

おほてらの　まろきはしらの　つきかげを
つちにふみつつ　ものをこそおもへ

せんだんの　ほとけほのてる　ともしびの
ゆららゆららに　まつかぜのふく